

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 第五福竜丸平和協会  
〒138-0081 東京都江東区 夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

## 第五福竜丸のたしかかな存在

寿岳章子

立命館大学の国際平和ミュージアムで十月初めから開催された「世界報道写真展」を見に行った。すさまじい写真が多く、息もつまる思いで胸をおさえて漸くに歩く感じだった。あちこちで起っている紛争が一番多く取り上げられていて、「死」が生々しく描かれていた。もちろんスポーツやパレーの美しいシーンもあって心も和んだが、概して世界の人間は何をしているのだろうと眉をひそめて考えこまざるを得ないのが多かった。

さて、日本が被写体になっているものは？と見てまわっていると、あったあつた、なかなか特異なものがあった。すまうの写真だ。四枚の組写真で、オーストラリア巡業の折撮られた、緊張感のあるいい写真ではあったが……。私は思った。すまうか！日本は平和なんだな、命をかける深刻な場面なんてほとんどなく、政治的にも何もない、だらーっ、のんびり。

京都にエンジンがやってきたのは八年二月三日だった。生協ががんばってその行事をみごとにやりおこした。エンジンがなかった第五福竜丸はさびしく夢の島に残されている。買収されたエンジンを取り付けた貨物船が紀伊半島御浜町で座礁、そのまま沈んでしまった。そのエンジンが発見され、皆の熱意でどうとう引き揚げられた。

夢の島へ夢の島へ。エンジンの旅がはじまった。もともと和歌山県の古座町で建造された第五福竜丸のエンジンが紀州沖に沈んだというものの何かの縁なのだ。発点は和歌山(昨今和歌山と

ついでに申告書

申告者 小塚博(こづか・ひろし)  
静岡県榛原郡相原町\*\*\*  
昭和6年2月22日(満77歳)生  
代理人 大石 保(おおいし) 住所略  
飯塚利弘(いひら) 住所略  
間間 元(まゐ) 住所略

私は四四年前の一九五四年(昭和二年)三月一日、マーシャル諸島海域で操業中にピキニ環礁で行なわれた水爆実験による放射能灰で被ばくした焼津港所属のまぐろ漁船第五福竜丸の二乗組員です。私たちが二名の乗組員は被ばく二週間後の三月一日に帰港しましたが、帰港途中から身体の具合が悪くなり、焼津の病院でただちに診察を受けました。そこで二週間手当を受けたあとと転院となり、三月二十八日から翌年の五月二日まで全員が国立東京第一病院と東大病院に別れて入院することになりました。私は国立東京第一病院に入院となりましたが、このときの傷病は当初は急性放射能症による白血球減少症や貧血などでしたが、そのうちに黄疸症状がでて肝臓障害があるとも診断されました。今思い返しますと、入院当初私

を含め乗組員のほとんどが急性放射能症の治療のために繰り返し輸血や血漿(プラズマ)の投与を受けておりました。その年の九月に同じ国立東京第一病院に入院していた無船長の久保山愛吉さんが黄疸が引かず亡くなったので、みんな次は自分の番かもしれないと不安でした。しかし幸いに私を含め残りの二名の病状はその後好転し、一年二ヵ月後の昭和三〇年五月二〇日に退院することができました。

その後私は自宅ではしばらく休養期間をとり、農業の手伝いなどをしていましたが、体調が良くなったためまもなく漁船員として再び就労することができました。七年ほど船に乗ったあとは収入を得るため農業のかたわら土木作業員として働いてきましたが、一五年前に胃を患って手術を受けたころから体調が不安定となり、一〇年ほど前にはすい臓炎を患うなど病院との縁が切れない生活になりました。そして五年ほど前に地元相良町の広瀬医院の先生にはじめて慢性のC型肝炎になっていると診断され、その後榛原総合病院に転院して現在も定期的に通院していま

受けた記憶もなく、退院後今日まで千葉市の放射線医学総合研究所(放医研)にも年一回呼ばれ、熊取先生をはじめ放医研の先生方の健康診断をずっと受けてきましたので、地元の医師から慢性の肝炎にかかっているといわれたときはすぐには信じられない気持ちでした。放医研が健康診断の結果を送ってくるようになったのは平成九年一月の時からですので、それ以前の検査結果の記録は私の手元にはありません。

平成三年から私も年金をもらうようになりましたが、そのほかに収入の保証はなく今後の医療費や通院費の工面の心配をしています。現在の主治医である榛原総合病院内科の清水恵理奈先生からは今後長期にわたり療養の必要があると言われていきます。かつて船員保険で治療した傷病が再発しているわけですから、労災保険に準じた扱いとして、再発疾病である慢性C型肝炎にたいしての療養給付を決定していただきたく申請をすることにしました。歳もと不安な日々を送っている身ですので、一日も早く安心して療養できますようよろしくお願いいたします。

# ラジウムの発見から一〇〇年

猿橋 勝子

今年、キュリー夫妻がラジウムを発見してから、丁度一〇〇年になる。一九世紀末は、放射線と放射能の発見が引き続き、科学にとって、大変画期的な年代であった。一八九五年一月には、ドイツの物理学者レントゲンがX線を、一八九六年にはフランスのベックレルがウランの放射能を、一八九八年には、七月に、キュリー夫妻により、大量のウラン鉱石からごく微量の新元素が発見され、マリイの祖国ポーランドにちなんで、ポロニウムと名付けられた。さらにその年の十二月には、同じくキュリー夫妻により新元素ラジウムが発見されたのである。

これらを反映して、一九〇一年、第一回のノーベル物理学賞は「X線の発見」により、W・C・レントゲンに贈られた。一九〇三年には第三回ノーベル物理学賞が「放

射能の発見」により、アンリ・ベックレルに、また「放射能の研究」によりキュリー夫妻の受賞と続いた。マリイ・キュリーはその後、一九一一年に「ラジウム及びポロニウムの発見による化学の進歩への貢献とラジウムの性質及び化合物の研究」で、二度目のノーベル賞(化学賞)を受賞した。現在まで約一〇〇年の間に「物理学」、「化学」、「医学・生理学」の分野でノーベル賞を受賞した科学者総数は四百数十人に及ぶが、日本人科学者は、湯川秀樹(一九四九、物理)、朝永振一郎(一九六五、物理)、江崎玲於奈(一九七三、物理)、福井謙一(一九八一、化学)、利根川進(一九八七、医学・生理学)の五人の男性科学者である。女性のノーベル賞受賞者は世界的に見ても、十人足らずであろう。

しかも男女を問わず、二度の受賞はマリイ・キュリーだけである。  
\* ラジウムから放出される放射線は、強い生物作用があるので、二〇世紀初頭から、ラジウムは積極的に、がんの治療に利用されてきた。パリ、ストックホルム、ニューヨークで発展したがんの治療は高い評価を得た。日本でも、がん専門の勸がん研究会付属病院が設立された時(一九三四年)、五グラムの貴重なラジウムが(勸三井報恩会から寄贈され、我が国におけるラジウムによるがん治療が開始された。

ヨーロップの片田舎ポーランドに生まれたマリイが、あこがれのパリ・ソルボンヌ大学の門前に立ったのは、女学校を卒業後八年目、マリイ二四才であった。屋根裏の貧しい学生生活であったが、パリで勉強していることに満足感を味わっていた。卒業したらポーランドに帰り、学校の先生になるかと考えていた。幸運なことに、フランスの大先輩の天才的な物理学者のピエール・キュリーに出会い、結婚することになった。尊敬する天才科学者の指導を受け、マリイの科学者としての資質は磨かれ成長した。しかし突然、結婚生活一年目で、ピエールは一九〇六年四月一九日、交通事故にあい、急死した。マリイ三八才であった。二人の娘をかかえ、悲しみのどん底に落ちたが、マリイはやがて悲しみのなかから、科学者としての活動に立ち上がった。マリイの心を貫いていたものは、ピエールに教えられた科学者としての高い信念、思想、社会的責任であったろう。マリイの二度目のノーベル賞受賞は、ピエールの死から五年後であった。

(本協会理事)



# みんなのためにがんばってくれ

— 小塚博さんの船員保険再適用の申告に —

大石 又七

九月十七日の朝、第五福竜丸乗組員の友人、小塚博さんから、「今日、新聞先生などと県庁の防災課に労働災害の適用が受けられないか書類を出しに行く」と電話があった。

しかし、日米政府がその年のうちに事件を政治決着させ蓋をしてみましたため、被曝した私たちも被曝者でありながら被曝者でなくなっていました。そして漁業関係の膨大な被害も一括して、わずかな見舞金で処理されてしまったのだ。この理不尽な行為に、当時東大病院側で治療を受けていた乗組員の一人、鈴木鎮三さんは当然の賠償責任を追究し抗議した。大きな渦の中で、たった一人の漁師の意見など通るはずがない、無視されるどころかしまいは狂人扱いされてしまった。同じ乗組員の高木兼重さんも、最後の病床で仲間たちのために訴え続けた。せめて原爆手帳ぐらい何とかならないのかと。見かねた医師は「原爆手帳が貰えるようになりましょう」と言って安心させ見送ったという。

久保山無線長は入院中、六カ月後に亡くなったが、あとの一〇人は一四年後頃から発病し始め一人づつ亡くなっていった。その間、小塚さんは胃がん、私は肝臓がんに罹ったが、お陰様でまだ生き残り組に入っている。小塚さんはその後、すい臓がんを患い入院を繰り返しながら今も病院通いをしている。

私も、この水爆被曝の処理には大いに不満がある。私たちが、一

年もしないうちに被曝者でなくなつたと言ふなら、その証明が見たい。後遺症についても同じだ。当時の輸血が原因と見られるC型肝炎ウイルス感染の問題もある。それともお前たちは見舞金を貰ったからそれでいいのだというのだろうか。この被曝には、はっきりした加害者がいる。私たちには何の落ち度もない。見舞金をだすのも、賠償金も後遺症の治療をするのも当然のことだ。それを政治決着と言つて無しにするのはおかしい。不満を表に出せないで、うじうじしている間に半分ちかい一人の仲間が死んでしまった。

きっぱりあきらめる事が大事だ、余計な苦労と心を悩ますだけだ」「あの人たちは共産党だ」など。当時の責任者がこんな圧力も掛ける。そして世間も何故か冷たい。そんな中、言いたいことも言えず、仲間たちは小さくなって死んでいった。発病した者、元気でいる者、その人その人の立場によって同じ元乗組員仲間でも意見はまったく違う。残念だ。

(第五福竜丸元乗組員)

【資料】第五福竜丸乗組員の小塚博氏が、この九月十七日、静岡県健康福祉部保険指導課長宛に「船員保険療養給付再適用についての申告」を行なった。被災から四四年、第五福竜丸乗組員から出されたはじめての要請を重く受けとめ、実現への支援と連帯を拡げたい。

静岡県健康福祉部保険指導課長殿  
平成10年9月17日  
船員保険療養給付再適用に